

つれづれなるまゝに 第3号

平成30年6月25日（月）発行



校長 深谷 浩一

将棋の世界

～自ら負けを認める唯一のスポーツ～



藤井聡太七段

普通、スポーツ競技は、「最後まであきらめるな！」と指導されます。野球で、5点差がついて、9回2アウトでランナーがいなくても、そこで試合を放棄することなどは許されません。しかし、自ら「負けました。」と宣言することによって、勝敗が決するスポーツがあります。さて、それはどんなスポーツでしょうか。

そうです、今流行の「将棋」です。昨年、中学生でプロ棋士となり、前人未踏の29連勝を達成して将棋旋風を巻き起こした藤井聡太四段（現七段）の活躍や「名人」や「竜王」など将棋の7つのタイトルすべてで「永世称号」を獲得した羽生善治氏が今年「国民栄誉賞」を受賞するなどしたお蔭で、将棋界は今、日本中から注目を集めています。以前、校門付近や体育館に掲げられている校訓を揮毫した大山康晴十五世名人のことを『教頭通信』で紹介したことがありますが、

その頃はほとんどの人が将棋には関心を示さなかったように思います。

将棋は、「頭脳ゲーム」とか「知的スポーツ」とか呼ばれていますが、単に勝ち負けだけを競うゲームではなく、駒の並べ方一つとっても作法や流儀がある、伝統的な様式美をもつ日本古来の奥深い競技なのです。自ら『負けました』と宣言することによってのみ、勝敗は決しますが、その瞬間は勝者も敗者もなく、激戦を記録した棋譜だけがそこにあるのです。

以前、羽生氏は次のように語ったことがあります。「我々プロ棋士は、玉将が詰まされるまで指さずに投了する。事実上勝負が決している場合には潔く負けを認めるのである。どんな対局でも勝負の終盤、この一局を終わらせるにふさわしい場面がある。そこには勝者と敗者が互いに相手の気持ちをおもんばかる、阿吽の呼吸のようなものがある。そのタイミングを見極めることができずに指し続けるのは見苦しいことで、日本人ならではの散り際の美学に反するのである。」と。（『文藝春秋』「投了するタイミングにも、散り際の美学がある。」（羽生善治）（2012 3月号）より。）



羽生善治永世七冠

私も玉将の頭に金に乗るまで指し続けたことはさすがにありませんが、羽生氏のように、「勝者と敗者が互いに相手の気持ちをおもんばかる、阿吽の呼吸のようなもの」の域に達することは未だできません。ただ、将棋には武士道のような「潔さの美学」があり、勝負は言葉を必要としない、心の奥底で繰り広げられる対話のような気がしています。（おわり）